



物語は贈物

新しい年が始まった。キリスト教では「新年」よりもイエス・キリストの生誕を祝う「クリスマス」とイエス・キリストの復活を祝う「イースター」の方が大切な行事である。

クリスマス前の四週間を「待降節」、イースター前の四十日間を「四旬節」といい、準備のために黙想などをする人が多い。昨年の待降節は下松カトリック教会の黙想会だけでなく、福岡県

宗像市にある黙想の家での一泊二日の黙想会にも参加した。

福岡黙想の家はカトリック教会の男子修道会の一つ、御受難修道会が運営するもので「祈りの場」神と人との出会いの場。三十の個室があり、敷地の広さは三万坪。山あり湖ありの自然に包まれた施設である。御受難修道会とは、一般の人は聞き慣れない名前だろう。主キリストが十字架につけられて殺されたという受

難を忘れることなく、その出来事を宣(の)べ伝えることを主目的に十八世紀にイタリアで創立された修道会である。

イエズス会やフランシスコ会といった修道会に比べると規模は小さく、世界に会員は二千三百人余り。日本には福岡のほか宝塚と東京に修道院があり、司祭の数は十七人という。その中の一人、来住(きし)英俊神父の指導による今回の黙想のテーマは「クリスマス・キャロル」。

「クリスマス・キャロル」は十九世紀に活躍したイギリスの小説家、ディケンズの代表作の一つで、何度も映画化されている。日本では年末になると「忠臣蔵」であるが、欧米ではこの「クリスマス・キャロル」が必ず放送されるという。世の中で一番大切なものはお金。ドケチで



三万坪という自然の中にある黙想の家

金持ちの老人、スクールジはイブの夜、精霊に導かれて自分の過去・現在・未来を旅する。自分の死後の未来があまりに惨めなことを知り、改心し生まれ変わる決心をしたところで目が覚める。クリスマス朝だ。守銭奴の老人は生まれ変わり、周囲の困っ

ている人たちに手を差し伸べ、ハッピー・エピソードで物語は終わる。黙想指導司祭は「物語は贈り物」という。クリスマスも神が愛するひとり子を人間の世界に遣わすという物語である。それを受け入れた時、人間は変わる。

人は誰も苦しみ、悲しみを持つている。ほんの少しでもその悲しみを和らげるために手を差し出す。それは大海のほんの一滴にすぎない。しかしその小さな行為こそが大切なのではないかと指導司祭はいう。確かに私は大きなことに目を向け、こんな小さなことと違って実

クリスマス・キャロルの映像を見ながらの黙想会はわかりやすかった。「家族の愛」「不運な人々への慈しみ」自分の殻に閉じこもらず、小さな小さな一滴を大切にしながら新しい年を生きてゆきたい。スクールジ老人のように新しく生きねばと思うのである。物語を大切にしながら…。

日本でもたくさん訳で出版されている「クリスマス・キャロル」



(元山口放送取締役ラジオ局長)